

3 - 10 伊豆半島北東部の活断層分布図

Active faults in the northeastern Izu Peninsula

星野一男・橋本知昌（地質調査所）

松田時彦（地震研究所）

Kazuo Hoshino and Tomomasa Hashimoto, Geological Survey of Japan
Tokihiko Matsuda, Earthquake Research Institute, University of Tokyo

著者らは伊豆半島南部の活断層調査にひきつづいて同半島北部の活断層調査を行いつつあったが、最近の伊東附近における異常隆起や河津附近における群発地震に関連して、この地域における活断層のデータを早急にまとめる必要が生じた。すでに該当地域の現地調査は1976年3月に包括的な概査を行っていたが、同年7月に伊東市・中伊豆町の範囲におけるや、詳細な現地調査を行った。

活断層は、(I)確実な活断層、(II)や、確実な活断層、(III)推定活断層、に分けた。この分類は下記文献に述べた通りの方法を踏襲している。すなわち、地形および地質の両面から規準を決める方式である。

(I)確実な活断層。これは確定的に活断層と考えられるグループである。更に細分して、歴史時代に活動の記録があるものは (I a) 地震断層とした。歴史時代の記録はないが第4紀層を変位させるなど地質的に第4紀における活動がはっきりと認められるものを (I b) とした。上記のどちらにもあてはまらないが、非常に新らしく、明瞭で、ある程度連続する変位地形を示し、地質的にも第4紀における活動を十分に推察し得るものを (I c) とした。

(II)や、確実な活断層および(III)推定活断層。上述の(I)よりは確定度は落ちるが航空写真および現地観察で活断層と認め得るものである。判定の規準としては約5kmの範囲に1あるいは2点で新鮮な変位地形の認められるものを(II)とし、地形上変位の有無は確定し難いがリニアメントとして明瞭な連続性のあるものを(III)とした。それぞれのグループで現地調査により断層面を確認し得たものを (II a) および (III a) とし、いまだ確認に至っていないものを (II b) および (III b) とした。

次に主要な活断層について説明する。

姫之湯断層群 (Hm)、加殿断層 (Kd) および大野断層 (On) は1930年北伊豆地震のときに活動した地震断層 (I a) である。中伊豆町姫之湯附近およびその北西にはこれらの地震断層とおそらく同性格のリニアメント群があり、これを姫之湯地震断層に附属させて姫之湯断層群と一括した。

鹿路庭断層 (Rk, Ic)。矢筈山の北方から遠笠山有料道路の鹿路庭峠を通過して西北西に伸びる断層である。本断層の断層面は直接に観察できなかったが有料道路沿いや徳永川の最上流部など周辺では平行する小断層や破碎帯が観察され地質断層としてかなり古い地質年代より存在していたと考えられる。天城火山や矢筈山の熔岩を切っている露頭はないが、矢筈山北方部では明瞭な断層地形が確められ、(Ic)と分類した。

徳永断層 (Tk, Ic)。中伊豆町大幡野高原北方の冷川に面する台地上の別荘宅住地中に西北西一東南東方向の7～10mの断層崖が観察される。この断層地形から判断すると断層は天城(火山)熔岩以後も活動していると思われる。

佐野断層 (Sn, Ic)。湯ヶ島町佐野。雲金などの東方約1kmをほぼ南北の走向で走る。断層面は確認できないが、河川の左ずれ地形、断層地形が明瞭である。

八丁池断層 (Hc, Ic)。天城山脈八丁池の東岸よりその北方にかけて明瞭な断層地形があり、Tkと同様に天城溶岩以後の断層活動を示していると考えられる。

水抜断層 (Mz, Ib)。本地域外であるが湯ヶ島町水抜附近には西北西一東南東の明瞭な断層地形があり、主断層あるいは従属平行断層が水抜、金山部落間で持越川の段丘を切っているのが観察された。この断層は与市阪で本谷川を越え、本地域内に延長すると考えられるが、本谷川東方では確実度がやや低下する。

遠笠山断層 (Tg, Ic)。遠笠山西方の有料道路西端にほぼ南北の断層コルが見られる。

小倉平断層 (Kk, Ib)。伊東市小倉平。断層地形はそれほど明瞭ではないが、本断層に平行して、山道で小断層群が針ヶ窪スコリア層を切っているのが観察された。

冷川峠断層 (Hk, II a)。峠より伊東方向へ数百米下った地点、白浜層群中に断層粘土を伴う断層面が観察された。

その他、大幡野 (Oh, II b)、柏峠 (Ks, II b)、万三郎 (Ms, II b)、浅間山南 (As, II b)、丸山 (Mr, II b)の断層もしくは断層群も断層地形によりやや確実な活断層と考えられる。

一般に本地域の大部分は天城火山および大室火山群の噴出物により被われており、これらにより第4紀末期の活断層の実態は判り難くなっている。傾向としては半島南部と同様に、西北西一東南東および北一南の2方向の活断層が卓越している。

参 考 文 献

- 1) 星野一男・橋本知昌・松田時彦, 1977; 伊豆半島南部の活断層について, 伊豆半島沖地震特別報告, 地質調査所 (印刷中)

